

博士論文要旨

題目 Semantic Nature of Verbs and Kinds of Relative Clauses
 (動詞の意味的性質と関係節)
指導教官: 郡司 隆男
著者 澁谷 みどり
提出年月日: 2018 年 11 月

本論文は、日本語の関係節のうち変化内在関係節 (Change Relatives; CR) と呼ばれる関係節を、構造が類似している主要部内在関係節 (Head-Internal Relative Clause; HIRC) と対比させて論じる。その上で、関係節内に生起する動詞の意味構造を分析し、両者の違いを明らかにした上で、CR について理論的な説明をあたえることを主要な目的とする。

Tonosaki (1998) においては、関係節直後に生起する「の」は pronominal であるとし、関係節内の項の属性 (property) が意味的な変化をするという特徴があると分析する。例えば、(1a) は、関係節内の動詞「沸かす」により内項の「天然水」が「湯」に変化するが、主節の動詞の項として振る舞うのはこの「湯」である。関係節直後の「の」は、この解釈された項をうける pronominal であり、「やつ」などの light noun と置き換えることが可能である。一方、(1b) では、関係節内の動詞「買う」は、この動詞の項である「天然水」に意味的な変化を与えてはならず、主節の動詞の項としても解釈は「天然水」のままである。この場合、関係節直後の「の」は「やつ」などの light noun と置き換えることはできない。

(1) a. CR:
 ケイトは天然水を沸かした { の / やつ } を飲んだ。

b. HIRC:
 ケイトは天然水を買った { の / *やつ } を飲んだ。

(1a) と (1b) との対比で示した CR と HIRC の差異は大きく次の 2 つにまとめられる。

- (2) a. 関係節内の項の名詞句の意味が何らかの意味で変化すれば、関係節直後の「の」は nominal。
 (CR)
 b. 関係節内の項の名詞句の意味が「関係節+の」と同じであれば、「の」は補文辞。(HIRC)

つまり、CR と HIRC には統語的・意味的な違いがあり、関係節直後の「の」の範疇と「関係節+の」があらわす指示物との関係性でこの 2 つが密接に関係する。また、それぞれの関係節内にあらわれる動詞のタイプとも連動していると考えられる。

そこで、本研究では第 3 章において、CR の関係節内にあらわれる動詞のタイプを、Tonosaki (1998) 等の先行研究から、(状態) 変化動詞が生起すると仮定する。一方、HIRC においては Kuroda (1992), Hoshi (1995), Shimoyama (1999), 三原・平岩 (2006) 等の先行研究のデータと Nishigauchi (2004) の指摘から、主題 (theme) 役割をもち直接目的語をとるタイプの動詞が生起すると仮定する。

次に第 4 章で CR に生起すると仮定する (状態) 変化動詞の意味を語彙概念構造 (LCS) (Jackendoff, 1990) による形式的な表示で与え、生成語彙意味論の枠組み (Pustejovsky, 1995; 影山, 2005; Hidaka, 2011) を利用した (3) のような表示システムを用い、動詞の意味構造を詳しくとらえる。Hidaka (2011) に従い、特質構造 (QUALIA) を真理条件的意味部門 (Truth-conditional Section=TS) と非真理条件的含意 (Non-truth-conditional Section=NTS) とに分ける。(状態) 変化動詞のタイプによっては、NTS に情報を持つ動詞も存在することを示していく。

$$(3) \left[\begin{array}{l} \text{ARG} = \left[\text{統語構造における項} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: その動詞のイベンチュアリティ} \\ \text{CONST: 語彙概念構造 (LCS)} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC: その動詞が持ち得る結果状態} \\ \text{AGENTIVE: その動詞が成立するための外的要因} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

第5章では、(状態)変化動詞やHIRCに生起するタイプの動詞の意味構造からCRとHIRCのそれぞれの関係節直後の「の」の違いを明確にし、特にCRではBECOME関数が存在する動詞が使われることを示し、CRのメカニズムを解明することを目指す。

例えば、関係節内の動詞が「彫る」のようなタイプの動詞は、共起する項により、変化動詞として使われるか作成動詞として使われるかがわかる。その場合、関係節の解釈とも連動し、CRかHIRCかに解釈が分かれる。

- (4) a. CR: ケンは木を彫った{の/もの}を乾燥させた。
 b. HIRC: ケンは仏像を彫った{の/*もの}を乾燥させた。

(4a)の「木を彫る」は次のような意味構造をもつと考えられる。変化に対応するBECOME関数は非真理条件的部門に含まれるとする。木を彫った結果できるものに対応する z はBECOMEの結果項であり、意味的には動詞の意味に内包されるが統語上には明示的にあらわれない(第4章を参照)。

$$(5) \left[\begin{array}{l} \text{ケンは木を彫る} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\text{CONST: ACT-ON} ([\text{ケン}], [\text{木}]) \right] \\ \text{NTS} = \left[\text{TELIC: } \exists z \text{ BECOME (BE-AT} ([\text{木}], z)) \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

一方、(4b)の「仏像を彫る」は次のような意味構造となる。真理条件的部門に、変化に対応するBECOME関数およびそれを引き起こすCAUSE関数が含まれるとする。この場合、彫る材料に相当する変数(y)は「木を彫る」の「彫る」では内項として統語的にあらわれているが、「仏像を彫る」の「彫る」では、暗黙の項となり、統語構造上にはあらわれない(第4章を参照)。

$$(6) \left[\begin{array}{l} \text{ケンは仏像を彫る} \\ \text{ARG} = \left[\text{D-ARG: } y \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\text{TS} = \left[\text{CONST: CAUSE} ([\text{ACT-ON} ([\text{ケン}], y)], [\text{BECOME} [\text{BE-AT} (y, [\text{仏像}])]) \right] \right] \right] \end{array} \right]$$

「彫る」のような動詞から、関係節内に(5)が生起すると、「の」で終わる関係節はCRとしての解釈が優先されるが、(6)が生起すると、HIRCとしての解釈が優先される。つまり、関係節直後の「の」は、関係節内にBECOMEを持つ動詞があらわれ、かつ結果項を持つ場合、pronominalとして機能し、結果項と照応関係を結ぶ。CRの構造では、BECOME関数が、真理条件部門に存在するか非真理条件部門に存在するかに関係なく、BECOME関数の結果項が重要となる。これがCRのメカニズムであると考えられる。一方、HIRCではBECOMEの結果項の値が特定されてはいるが、この場合は、作成動詞の意味をもち、名詞句があらわす個体の存在の出現を意味する。HIRCの構造では意味構造での要素は重要ではなく、統語上に直接目的語として生起しているかが重要な要素であり、HIRCとしての解釈に関わると考えられる。

CR及びHIRCが関係節内に生起する動詞の違いにより解釈が異なり、CRには(状態)変化動詞が生起することが多い点に着目することで、生成語彙意味論の考えを取り入れた表示システムによる理論的な説明をCRにあてることができ、それによって、HIRCに関するメカニズムの解明の貢献につながるかと考えている。

参考文献

- Hidaka, T. (2011). *Word Formation of Japanese V-V Compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.
- Hoshi, K. (1995). *Structural and Interpretive Aspects of Head-internal and Head-external Relative Clauses*. Ph.D. dissertation, University of Rochester.
- Jackendoff, R. (1990). *Semantic Structures*. The MIT Press, Cambridge.
- Kuroda, S.-Y. (1992). Pivot-Independent Relativization. In Kuroda, S.-Y. (Ed.), *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*, pp. 114–174. Kluwer Academic Publishers, The Netherlands.
- Nishigauchi, T. (2004). Head-Internal Relative Clauses in Japanese and the Interpretation of Indefinite NPs. *Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin (TALKS)*, **7**, 113–130.
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. The MIT Press, Cambridge.
- Shimoyama, J. (1999). Internally Headed Relative Clauses in Japanese And E-Type Anaphora. *Journal of East Asian Linguistics*, **8** (2), 147–182.
- Tonosaki, S. (1998). Change-Relatives in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics*, **16**, 143–160.
- 影山太郎 (2005). 「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて—」. 『レキシコンフォーラム No.1』, pp. 65–101. ひつじ書房, 東京.
- 三原健一・平岩健 (2006). 『新日本語の統語構造—ミニマリストプログラムとその応用』. 松柏社, 東京.